

山武市で福島県飯館牛の血統を守りたい

山武市

小林 将男 さん

福島第一原発事故後、飯館村から牛と共に山武市へ安全で美味しい牛肉を食卓に届けたい。その信念は変わらぬ新しい土地での新しい繋がりを大切に、飯館牛を後世に引き継ぐため前へ進む



「山武市

のみなさんありがとうござい

す。東日本大震災の被災地、被災者へ温かい多くの支援活動や支援金をいただき、心からお礼申し上げます」と、感謝の言葉を述べる小林将男さん。

皆さんは、知っていますか? 「飯館牛」を。飯館牛は、福島県内ではトツクラスとされるブランド牛。その肉牛を小林さんは、現在奥さんと二人三脚で育てています。

ご存じのとおり『飯館村』は、福島第一原発の事故で、国から計画的避難区域の指定を受け、村民全員避難を余儀なくされました。

村では、飯館牛を育てる農家が多く、228軒の肉牛農家がありました。原発事故後はほとんどの農家が牛を手放すことに。小林さんも廃業が続くか決断を迫られた。答えは、『移転しても肉牛を育てる』でした。自分たちの生活より『牛』を優先にし、施設の大きさや立地条件等を考え山武市(板中新田)に避難することに決めました。

100頭余りを知人の手を借りながら、トラックで何往復もかけ山武市へ運び、震災から3か月後に牧場を再開。移転直後は牛も環境が変わり飼料を与えても育たず心配をしましたが、今では順調に生育し、170頭が増えたとのこと。

移転

から2年が経ち、「ようやくやく牛も私たちも、落ち着きを取り戻しました」と笑顔で話す小林さん。

山武市の印象を聞いてみると「牛にとってもいい環境ですね。森があって、風



があって、水が良くて、静かです。環境が整っていますよね」

「ここに牛を連れてくることで、近

隣の方に迷惑はかけられないので、お肉の他にも、安全確保のため飼料と堆肥の放射線量の検査を千葉県が行ってくれました。お肉は継続的に県が検査をしてくれています」心配だった放射線量も、県の厳しい検査をクリアし、平成24年4月から出荷を再開しましたが、今も「飯館牛」の名称で販売することはできないという。「故郷の飯館の名を使えない悔しさは残ります。が、牛の事を考え、新しい名称でデビューさせたいので悲しんではいけない。生活していかなくてははいけなからね」と答えてくれました。

また、飯館へ帰って肉牛生産ができればいいが、確かな答えがない中自分たちを温かく受け入れてくれた山武市で生産を続けたいと話します。20年30年先を見据えている小林さん。「何処の場所経営しても、お肉の中身で勝負ですよ」と強くたくましい生産者の一面をのぞかせます。

小林

さんは、市内の豊岡稲（飼料稲）を牛の飼料として購入。また、蓮沼の酒蔵の酒粕を試したり、牛舎の敷材には、市内の林業から排出されたおが粉を使うな

さんは、市内の豊岡稲（飼料稲）を牛の飼料として購入。また、蓮沼の酒蔵の酒粕を試したり、牛舎の敷材には、市内の林業から排出されたおが粉を使うな



ホールクroppサイレージ



酒粕



おが粉

ど、「山武市の特産品と一緒に、並べていけたらうれしいですね」と山武らしさが詰まった安全で美味しい最高級の肉牛を追い求めています。

今後、同じ肉牛農家との交流の場へ積極的に参加するなど、地域と密着し共に成長していく牧場経営をめざしています。



「震災 直後は、足元が見えなかったが、山武市の皆さんが足元を明るく照らしてく

れました。将来は、牛好き、肉牛の仕事が好きな若手の後継者を山武市で育てたいです」と、力強く語ってくれました。

※小林さんの牧場は期限付賃貸契約となっており、市内で牧場の移転先を探しています。（7月19日現在）

東北被災地支援に取り組み秘書課渉外係では、候補地の仲介等で支援を行っています。

空いている土地に心当たりのある方は、情報をお寄せください。

問 秘書課渉外係 ☎(80)1292

震災避難者・被災者の交流の場「森のじかん」開催

東日本大震災で被災された方々の交流の場「森のじかん」の第1回目が7月11日、あららぎ館で開催されました。

市と市民活動団体・社会福祉協議会が連携し、被災された方々の出会いと情報交換、地域との交流の場として企画。

福島県や岩手県から避難された約20人が参加し、地元の新聞に目を通したり、お互いの情報交換や会話をするなど交流を深めました。

この「森のじかん」は今後も月1回第2木曜日に開催します。次回は8月8日(木)です。

問 秘書課渉外係 ☎(80)1292

